

第40回現地研究会に参加して

森 田 茂
(酪農学園大学)

昭和61年度の現地研究会は、「地域農業複合化と畜産の役割」をテーマとして8月22日中札内村、士幌町を中心として開催された。8月21日新嵐山荘に集合した約60名の参加者は、翌日の見学会を前に、総会や勉強会など予定のスケジュールを行った後、野外でのバーベキューに舌鼓をうち、最近の畜産情勢などさまざまな話題に花をさかせた。その後も、一部の参加者に夜は長く続いたようであったが、各部屋に分かれての開催であったため、その内容は明かではない。

朝、8月というのに風はやや冷たかった。朝露に濡れた草木を眺めながら、バス2台に分乗した参加者は、予定の午前8時20分に出発した。その日、見学した主な施設は、次の通りであった。

(中札内村) みどり牧場
レンダリング工場

(士幌町) 上居辺肉牛センター
酪農団地 富田牧場

見学終了後、帯広駅前解散となり、昭和61年度の現地研究会も無事日程を終了した。

1. 中札内村における農業システム

中札内農協で中札内村における農業システムの概要について説明を受けた。中札内農協といっても、その建物には「農協」と書かれた看板は見あたらず、「農業管理センター」と書かれており(写真1)、地域農業の核としての役割を果たそうとする意気込みが感じられた。センターでの説明の後、参加者はバスに乗りみどり牧場へと向かった。

みどり牧場は、2戸共同の有限会社であり、労働力は5名である。搾乳牛66頭、育成牛90頭の家



写真1 中札内農協の正面玄関

畜以外に、耕地にはデントコーン、牧草、ビート、人参、長芋などが栽培されており（写真2）、これらの作業もあるが、徹底した家畜の省力管理が5名の労働力での経営を可能としている。

泌乳牛への飼料給与は、グラスサイレージ、コーンサイレージに配合飼料を混ぜ、さらにビタミン、ミネラル類および緩衝剤を添加した、いわゆ

るコンプリートフィードを自由採食させていた（写真3）。コンプリートフィードに、出荷できない屠人参を加えているのは、畑作複合経営の強みであろう。牧草はすべてサイレージに調整しており、乾草調整のための手間を省いている。飼料は成分的には、乳量32kgを目安としているが、採食量は自由採食としているため制限しておらず、



写真2 みどり牧場耕地



写真3 みどり牧場の飼槽

低能力の搾乳牛は結果的に搾乳中肥育となっている。これらの牛は肉用出荷することにより、低能力牛の淘汰につながっている。後代検定が確立され、若牛の能力が向上していることを考えれば、この方式がより高い能力を持つ牛の確保につながっていると思われる。現実には、みどり牧場における搾乳牛に占める初産牛の割合は、45%であるとのことだった。

牛舎施設ではミルクングパーラーを有し、泌乳牛舎はフリーストールバーンであった。いずれも、省力管理を念頭に作られたことを示している。作業機械のほとんどは、近くにある農家出資の「機械センター」が管理しているのだそうである。この機械センターでは、糞尿処理や土木作業も請け負っているとのことであった。これらも、機械の手入れなどでの労力を考えると極めて省力的であり、また機械への過剰投資も避けられる結果となっている。さらに配合飼料は、共同出資の自家配工場を持ち、年間2,000 tの配合飼料を製造しているとのことであり、中札内村農業システムの巨大さと緻密さを見せつけられた気分であった。

みどり牧場は、畑作複合経営であるから畜産より出る堆肥は、有機質肥料として畑作部門に還元している。中札内村全体としても、後述する土幌町の場合と同様一定の交換比率で、畑作農家に堆肥が引き取られているそうである。この当り前と思われるシステムの確立が、現在の畜産にとって重要なことであると感じた。また、中札内村での堆肥の循環を考え、畑作および畜産農家の数を調節する場合もあり得るとのことであった。

みどり牧場を後にしたバスは、約30分で周囲を木々に囲まれたレンダリング工場に到着した。レンダリング工場は、食用鶏解体工場や油脂プラントを併設していた。レンダリング工場では、斃死家畜を原料として飼料用あるいは肥料用ミートボーンミールの製造を行っていた。畜産より出るものを少しも無駄にしない姿勢に頭が下がるとも

に、この種の工場の立地場所や、他の施設との位置関係なども含め、極めて計画的に行われており、中札内村における農業管理センターの役割の重要性を強く感じた。

2. 土幌町における畜産

＜肉牛センター＞

中札内農業管理センターの近くの食堂で豪華な昼食を取った後、バスは土幌町へと向かった。土幌町における畜産の概要について、土幌農協で説明を受け、上居辺地区にある肉牛センターを見学した。土幌町には、現在このような肉牛センターが14カ所あるとのことであった。ここでは、計4棟の牛舎とその付属施設よりなっていた。昭和59年12月に入植し、現在の飼養頭数は約800頭である。子牛は、生後1カ月をカーフハッチ（写真4）で飼い、その後哺乳期、育成期、肥育期別に飼養していた。離乳の時期は、生後35日であり、10カ月目より肥育し、18カ月の出荷時まで平均690 kgとするとのことであった。

肉牛生産においては、事故率を低下させることが重要な問題である。上居辺肉牛センターにおける、現在の事故率は、2%弱と極めて低かった。

上居辺肉牛センターで、ひときわ目を引くのは、25m×80mの堆肥場である。ここで、かつてスラリーとして処理していた糞尿も現在は、堆肥として処理している話を聞いた。肥料としての堆肥の価値が上昇している現在、中札内村と同様に堆肥は一定の交換比率で畑作農家に還元しており、農業のなかに占める肥料供給源としての畜産の役割が再認識される。

話題は土幌町から離れるが、鹿児島のある地方では、いくつかの畜産農家が共同出資した、肥料製造プラントがあり、そこで作られた肥料は他県へも出荷され良好な売行きであるとのことであった。このような例まで整わないにしても、堆肥も有用な資源として活用する方策の整備が、もっと



写真4 上居辺肉牛センター

広く、一般的に行われることを期待する。

土幌農業の特徴のひとつに、生産、加工および流通の一貫作業があり、馬鈴薯においてはすでに確立されている。今後は、牛肉生産においてもこの方向を取るであろうし、一部食肉センターを持つことから確立されていると言える。いずれにしても、牛肉生産それ自体と、堆肥という副産物を通じた他農業との結び付きとの両面で、土幌の肉牛経営はうまくいっているようである。

〈酪農団地〉

上居辺肉牛センターより、土幌町市街を抜け、音更川を渡り、昭和53年入植の酪農団地に到着した。見学した牧場は、富田さん経営の富田牧場であった。昭和53年当時、規模拡大のため入植したとのことであった。現在の規模は、搾乳牛60頭、総頭数で120頭であった。われわれが見学に入ったとき、たまたま他の見学者も来ていた。四葉牛乳の消費者であるとのことであり、頻繁に来ることであった。そのため、衛生管理にたいへん気を使っているそうである。

牧草の収穫などは、隣接する同じ酪農団地内5

戸の農家共同で行っているとのことであった。個人牧場の意識を抑えるためか(?!), スチールサイロの文字は、いまだに「C牛舎」となっていた(写真5)。

牛舎内には、防暑用のエアダクトが牛のき甲上部に設置されていた(写真6)、極めて廉価で設置でき、効果も良好とのことであった。

今回の見学から、複合化した農業の中での畜産の役割は堆肥生産にあるという、当然と言えば当然な結論になるのであろうが、当然なことをなぜシステムとして考えなければならなくなったのか、そのあたりの問題については、今晚グラスを傾けながらじっくり考えてみるつもりである。



写真5 酪農団地
富田放場スチールサイロ



写真6 酪農団地 富田牧場牛舎内部